

## 企業

## 温泉に入ること地球とつながり、自然と共生する。

大崎市

大沼 伸治 旅館大沼

取材日 2012.09.11

旅館大沼の五代目湯守。伝統的な湯治をベースとしながら現代にあった新しい癒しのかたちを提案し、宮城県鳴子地域の活性化や地域づくり、里山保全にも熱心に取り組む。東日本大震災後、行政の要請で南三陸や女川、東松島の人々を鳴子温泉地帯で受入れることになり、旅館大沼では2011年4月～9月までに3家族の受け入れを行なった。

## 東鳴子における湯治の歴史

鳴子温泉郷の歴史は平安時代の約1,200年前、東鳴子は約650年の歴史があると言われている。東鳴子には伊達藩時代、「御殿湯」という伊達のお殿様が入る温泉があった。現在の東鳴子温泉神社のあたりに位置し、当時「子宝の湯」としても有名だった。なかなか子宝に恵まれなかったあるお姫様が御殿湯に入り、2人の子を授かったという伝説が語り継がれている。御殿湯は明治43年の大洪水で壊れてしまい、残念ながらそのまま復活することはなかった。現在は、JR陸羽東線鳴子御殿湯駅の名称にその名残がある。

湯治は日本において古くから行なわれてきたが、文化の起源は江戸時代であると言われている。1600年関ヶ原の戦いの後、徳川家康が1週間ほど熱海に滞在し、温泉で保養した。それを大名たちが真似して広まったと言われている。しかし「温泉の力」は、原始の時代から「不思議なお湯」として親しまれてきたのではないだろうか。

東鳴子は観光地ではなく、保養基地として栄えてきた。一次産業に従事する多くの人々が湯治に訪れていた。さなぶり、稲あげ後の湯治、8月の土用の丑の丑湯治、農閑期に一番長く滞在する寒湯治のための農民、陸に上がった漁船員や漁獲が一息ついた漁師たちで賑わっていた。東日本大震災のあるなしに関わらず、昔から沿岸部の方々とつながりがあった。毎年宿泊にくるお客様の部屋は決まっていた。だから、お客様も鳴子の親戚の家に行く感覚で湯治へ来ていたのではないかと感じていた。お客様はお孫さんが生まれると湯治場に連れてきて、旅館内はとても賑やかになった。昔は私もお客様のお孫さんと一緒に遊んだ思い出がある。宿とお客様の家族ぐるみの交流やお客様同士の交流があり、湯治場は独特のコミュニティの場であった。湯治には「お湯の力」と「コミュニティ」という2つの大きな魅力がある。



## 3月11日 14時46分

当時、妻が妊娠していたので、古川でパパママ講座（安心して出産育児ができるよう妊婦やその家族が参加する講座）に参加し、新しい合同会社の登記を済ませて、大沼旅館へ戻った。その後、旅館の事務所で山形の方と打ち合わせをしていると、突然大きく揺れた。揺れはなかなか止まらない。妊娠している妻が心配で、建物が崩れると危険なので外へ避難した。通りに出た途端、屋根に積もっていたすべての雪が、どどーっと雪崩のように落ちてきた。事務所は書類などが散乱し、ぐちゃぐちゃになってしまった。5～6組のお客様が宿泊していたので、揺れが収まってからすぐに安全確認をした。その後、従業員や家族の安全確認を行なった。余震が続きとても寒いのに停電してしまったので、広間に旅館内避難所を作って、お客様を含め皆で集まり、ろうそくを灯して石油ストーブで暖をとった。その日はラジオで情報を得た。「遺体が200体」と放送されていて、なぜ亡くなったのか、何が起きているのか、想像がつかなかった。津波が沿岸部を襲い、気仙沼でも火災が起きていると報道されていた。大震災の全容は発生から4日ほど後に新聞で知った。お客様の中には帰るに帰れない状況で、長くて2週間滞

在した方もいた。

電気はすべて止まり、3～4日は暖房などが使用できなかったが、水道は止まらなかったし、プロパンガスなので調理はできた。土日の宿泊客に備え、食料も備蓄してあったことも幸いだった。鳴子で買いだめをする人はいなかったし、スーパーマーケットに行列ができる様子もなく、食べ物に困ることはなかった。鳴子は個人商店が多いので、パン屋もラーメン屋も普通に営業していた。バスが運行していたので、仙台から鳴子へ買い出しに来る人がいたほどだ。電車は1ヶ月ほど止まったが、バスは地震のあった当日も運行していた。困ったのはガソリンで、手に入らないのは非常に不便だった。

## 先祖が残してくれた仕組み

温泉は共同源泉と自家源泉の2系統ある。2系統とも電気を使ってポンプで送っているの、停電で止まってしまった。震災当日はタンクに貯まっている残りの分で、男女で時間を区切り皆でお風呂に入った。沿岸部で苦しんでいる人を思うと温泉に入っていることを、申し訳なく感じた。一方では、自然の恵みで温泉に入れていて、もう一方では自然災害によって生死の境にいる人たちが大勢いる。同じ自然だが、慈悲と無慈悲、自然の真逆の2つの側面を知った。電気もつかない真っ暗な中で空を見上げると、星がとてもきれいで悲しくなった。

翌日、停電でポンプは止まっているので、当然お湯も止まっているだろうと思ってお風呂へ行くと、湯気がのぼっていて不思議に思った。「あれっ？ポンプは停電で動いていないし、タンクは昨日お風呂に入ったので空になっているはずだぞ？」湯口に手を当ててみると、確かに熱いお湯が流れている。驚いた。その後すぐに「ああっ！これは先祖が100年前、源泉からお湯が傾斜をつたって入ってくるように作ったんだ！」と気づいた。先祖が残してくれたお湯をくみ上げる仕組みが、停電したことで初めて分かった。驚きと同時に先祖に対する感謝と畏怖の気持ちがにじみ出てきた。すべてが途切れた時でも、お湯がこんこんと湧いている。人を癒すお湯の力にも感動した。水もガソリンも灯油もない、何も必要とせずお湯が湧いてくる。完璧な仕組みだと思った。仕組みはシンプルほど長持ちする。風呂を無料開放して、町の人たちに入りに来てもらった。

## 二次避難の受け入れ

行政から要請があり、南三陸や女川、東松島の人々を鳴子の温泉地帯で受入れることになった。全体



朝日が差し込む千人風呂（旅館大沼）

で1,000人以上の受け入れを行なっている。私の旅館では2011年4月～9月までに、女川の3家族を受け入れた。一緒に枝豆作りをし、家族のように過ごそうと心掛けた。避難してきた方々は当然ショックが大きいようで、最初は散歩をする人もおらず、神経質になっていた。いろいろな慰問団が鳴子に来てくれたし、様々なイベントを企画してたくさんお誘いしたので、避難してきた方々は少しずつ外へ出るようになっていった。震災後、震災以前から付き合いのあった沿岸部の人たちも徐々に旅館へ来ている。震災があっても交流は続いているが、なかなか前のように戻れない。仮設住宅は狭いし壁も薄く、これまでにないストレスで、まだまだ気軽に旅行できる状況ではないようだ。

## 心と身体を再生する場所

人間も含めて様々な種が、地球に暮らしている。日本は火山国で温泉といった恩恵を受けることもあるが、地震や台風などの自然災害も非常に多い。昔から自然に翻弄され続けてきた中で、日本人は自然をコントロールするという概念は持たなかったはずだ。漁師は海から魚を獲り、農家は土に種をまいて作物を獲り生計を立ててきた。自然から命の源をもらい、疲れたら温泉などの自然に癒されてきた。我々はまさに自然と寄り添って暮らしてきた民族なのだ。これまで我々は自然と折り合いをつけて生きてきたし、これからも折り合いをつけて生きていくしかない。

地震は必ず起こる。東日本大震災の記憶でさえ時間とともに風化し、いずれは忘れられてしまうだろう。しかし、日本に住んでいたら避けては通れない。これまで人間中心に、経済を中心に考えすぎたのではないだろうか。儲けのためなら何でもしてきた。環境を破壊しようが、誰も止められな

かった。現在の経済の仕組みは、限りない消費の方向に進んでいる。我々はそうした方向が自分たちの居場所である地球を、自ら壊していることに気づいていない。そうした中で起きた地震だということを忘れてはならないと感じている。

福島原発事故で子どもたちは外で元気に遊ぶこともできずにいる。なぜこうなってしまったのか。原子の世界までコントロールしようとする人間の欲が原因ではないのか。単に震災で壊れてしまったものを元通りに直すのではなく意識の変革をしなければ、食べ物すら手に入らない世界になる。この震災は1,000年前に起きていれば、自然災害だったが、現代に起きたことは人類への警鐘、文明の転換点と捉えるべきだと思う。震災が起こり、紙幣がただの紙切れになった時、我々はお金があっても幸せではないことに気が付いた。お金を

使うことだけが幸せなのか。まさに本当の豊かさとは何かと考える時だ。私にとって豊かさは全てが断絶された中でも湧いてくる自然の恵みの「お湯」、またそのお湯をくみ上げる仕組みを残してくれた先祖とのつながりが象徴している。温泉に入ること地球とつながり、自然と共生する。我々は自然がないと生きられない。

シンプルが一番である。電気が止まっても、最低限生きていけるというよりどころは重要だし、何より地球と共存していくことが大切だ。鳴子は地球の熱エネルギーを与えられた恵まれた場所で、ポテンシャルが大きい。湯治場は身体を癒し、自分が自然の一部だということ、自然の恩恵を受けて生きていることを気づかせてくれる心身の再生の場だ。湯治場である鳴子が、人の命と地球の命が循環する場になることを願っている。

## 個人

# 南三陸町から新たなライフスタイルや価値観を提案していきたい。

南三陸町

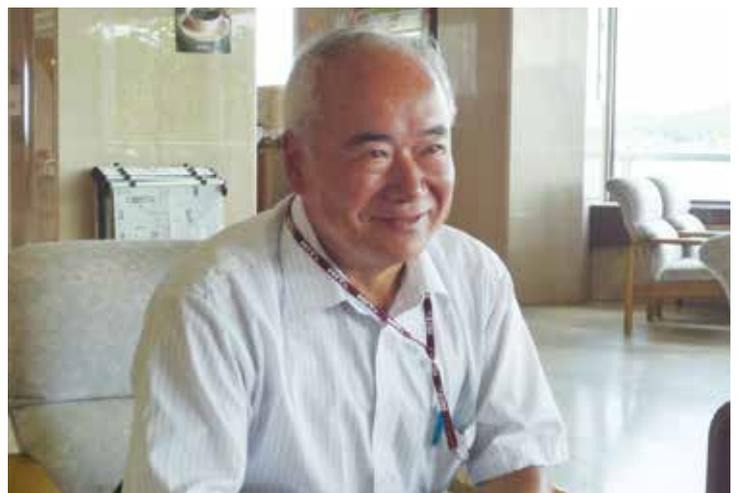
後藤 一磨 個人

取材日 2012.09.18

地域の歴史や文化、自然が大切であるとの考えから、宮城県南三陸町の文化財保護委員や南三陸ふるさと研究会、観光協会地域ガイドとして活動してきた。東日本大震災後、津波の教えを復興と新しいまちづくりに生かし、自然や文化を次世代へ受け継ぐために「福興市」語り部プロジェクトで自らの被災体験を語る語り部ガイドとして活動している。

## 震災以前の活動

私は南三陸町の文化財保護委員だ。地域の歴史と伝承が大切であると考え、「南三陸ふるさと研究会」で活動している。この研究会は、南三陸町の文化や自然などさまざまな分野を題材とし、ふるさとのより良い未来を志向して、過去と現在を研究する会だ。東日本大震災以前から、津波に関する伝承はたくさんあった。例えば、南三陸町の入谷(いりや)地区には、津波によってそこまで船が入ってきたから「ふなくぼ」、津波が来たがそこで家が残ったから「残谷(のこりや)」といった地名が残されている。東日本大震災以前、話が伝わるうちに大げさになったのではないかと、縄文海進の水位が高かった頃の話ではないかと思ひ、ふるさと研究会で津波をテーマとして大きく取り上げることはなく、そうした地名の由来の検証を行なうことはなかった。しかし、それらの伝承が確かなものであったことが、震災後に検証されている。



3月11日 14時46分

私は戸倉中学校同窓会の役員だ。あの時は卒業生の同窓会入会式を終えて、校長室でお茶を飲んでいた。翌日は卒業式だ。そろそろ帰ろうかと、玄関で校長先生や他の同窓会の役員たちと「明日は晴れるといいね」と話しながら靴を履いている時